滋賀文化財だより
NO. 109
1986. 4. 1
●編集発行／財団法人滋賀県文化財保護協会

141. 昭和60年度滋賀県下における発掘調査の紹介 その3

26. 弥生時代後期の前方後方形周溝墓
近江八幡市浅小井町　高木遺跡

高木遺跡は、近江八幡市浅小井町に所在する弥生時代の遺物散布地であった。今回の調査は、県営干拓等農地整備事業に係るもので、約 8,000m²の調査区から弥生時代中期の方形周溝墓8基・土壙150基と、弥生時代後期の前方後方形周溝墓1基が確認された。

方形周溝墓と土壙からは、畿内第Ⅲ～Ⅳ様式の土器が多量に出土しており、同時期のV字溝を境にして、東側に方形周溝墓群、西側に土壙群を形成する。

8基からなる方形周溝墓のさらに東側には、安土町新開遺跡の方形周溝墓群が確認されており、広範囲の群の存在が推測される。

土壙の中には、人骨や歯を出土するものもあり、土壙墓としての性格をもつものが多数認められる。

さらに土壙群の上には、弥生時代後期の前方後方形周溝墓と環溝が築かれている。

前方後方形周溝墓は、横長の長方形を呈した後方部と短かい前方部からなり、全長34.4m・最大幅22.8mを測り、幅2.8～6.8mの周溝がめぐる。

今回の調査では、前方後方形周溝墓の約3分の1が対象となったが、周溝墓に伴う主体部等の遺構は確認されなかった。

前方後方形周溝墓と土壙墓群

この周溝墓の西側から南側にかけては、環溝とみられる遺構があり、南西部の一画に100個体以上の土器（壺・甕・高杯・器台・手焙り形土器など）が供献されていた。

この前方後方形周溝墓と環溝は弥生時代後期中葉のもので、古墳造営以前における、首長墓の一形態として促えられよう。

（㈶滋賀県文化財保護協会　宮崎　幹也）

27.「論語」と記された習書木簡を検出
近江八幡市馬淵町　勧学院遺跡

当遺跡は近江八幡市南西部に位置し、これまで白鳥川河川改修工事等に伴う発掘調査で、弥生時代中期から鎌倉時代にかけての集落跡が発見されている複合遺跡である。今回調査は、県営ほ場整備事業桐原・馬淵工区パイプライン敷設に係るもので、パイプ埋設箇所（幅2m）と工事に伴い耕土を除去し遺構面が露呈する約700m²を対象に実施した。そのうち馬淵小学校のグランドの南の水田より弥生時代中期の方形周溝墓を切る形で奈良時代中期(750年頃）に廃絶した完全な井戸を一基検出した。

井戸は一辺80cm、深さ150cmの正方形で、四角に角柱を立て、幅20～30cm、長さ150cm、厚さ2～3cmの板を四方に立てかけ井戸枠としている。埋土からは、木簡の他、土器片、柳箱、網篭、斎串、桃の種子、瓜が出土している。木簡は、井戸枠の間より出土しており、縦331mm、横48mm、厚さ10mmの板で上下の片面に幅15mmの切れ込みがあり何かの転用材である。墨書は明瞭に遺存しており、「論語」「天」「道」「我」「左右」「之子」の総数21字が記されており同じ字が何度も書かれていることより手習いをしたと思われる。

出土木簡

「論語」と明記された木簡は、静岡県城山遺跡の他、平城宮式部省跡、二

条大路北側溝跡で出土しており４例目である。『論語』は当時大学寮等で定められた常用のテキストで役人の間では必読書であり、登用試験等にも用いられた。従って今回出土した木簡より、勧学院遺跡周辺において下級役人等の邸宅跡、あるいは郡衙の存在した可能性が充分考えられ、今後、近江八幡市周辺の地域史を探る意味でも貴重な資料といえる。

（㈶滋賀県文化財保護協会　仲川　　靖）

28．弥生時代末～古墳時代後期の集落

安土町中屋　中屋遺跡

中屋遺跡は、昭和60年度県営ほ場整備事業に伴う調査で、昭和60年５月～８月まで実施した。当遺跡は沙々貴神社の南に広がる現在の中屋集落の南方、標高92ｍ前後の洪積台地の縁辺部に位置する。背後の繖山の支尾根上には古墳時代中期～後期に相当する常楽寺山古墳群が存在する。周辺には慈恩寺遺跡、小中遺跡等の弥生時代末～室町時代の集落跡がある。したがって、今回の調査地は両遺跡の範囲を確認することに主眼が置かれた。

検出された遺構は、竪穴式住居10棟、溝１条、土壙、不明遺構、柱穴群等がある。

竪立式住居の平面形はいずれも方形を呈し、うち１棟は弥生時代後期後葉、他は古墳時代中期から後期のものである。主柱穴は４本認められる。また、４棟で南壁の中央部に平面方形で内部は円形掘方を呈する貯蔵穴が認められた。そのなかで、完形の土器が多量に出土したＳＢ２は他に比べ、その優位性が認められる。

ＳＢ２は南北5.7ｍ、東西5.6ｍを測る方形住居で主柱は４本。西壁中央部にカマドをもち、東壁中央部に前述の貯蔵穴をもつ。さらに、遺構検出時には、炭火材が多くみられ、この住居は火災を受けたようである。出土遺物は、カマド周辺から、土師器甕、甑、高杯等があり、他に土師器壺、杯、須恵器壺底部がある。時期は６世紀初頭である。

溝は竪穴式住居の南側で、北西から南東へのびるものであり、住居区を区画する溝と考えられる。

柱穴群のなかには黒色土器Ａ類が出土するものがあるが調査区域外にのびるため、規模等は明らかでない。

以上、中尾遺跡は、弥生時代末、古墳時代中期～後期に相当する集落であると判明した。よって、小中遺跡と同時代に属する遺跡となり、古墳時代の住居群は常楽寺山古墳群の造営時期等との関連が注目される。

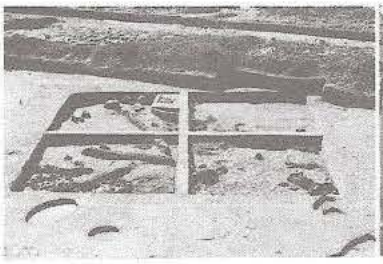
（安土町教育委員会　小熊　秀明）

29．多彩な木製品が出土

日野町石原　宮ノ前遺跡

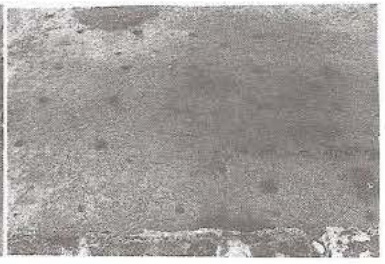
本遺跡は、日野川右岸段丘上に位置する。調査は昭和60年度県営ほ場整備事業に伴い滋賀県教育委員会の委託により日野町教育委員会が実施した。調査地域は昭和59年度調査地の南西方向にあたり、現地調査は７月に着手し10月に完了した。調査の結果、検出された主要な遺構は沼跡・溝跡である。沼跡は幅約50ｍ、最深部約 2.4ｍの規模をもち、堆積土内、特に最下層より須恵器（杯・甕・瓶）・土師器（杯・高杯・甕）等の土器類の他木製品が多数出土した。特に木製品には竪杵・えぶり・剣・刀・槍・弓・矢・かんざし・漆器椀等をはじめとする多量の加工木がみられる。溝跡は沼跡の北西及び南東方向の２個所で検出された。前者は蛇行しており約34.5ｍ分確認できた。深さは約1.8～2.6ｍで中央部が一段深くなっている。この中央部を中心に土師器（椀・壺・高杯・甕）、須恵器（杯・甕）、黒色土器（椀）、木製品（横杵・曲物の底）等が出土している。後者は弧状に弯曲した状態で約45ｍ分確認された。幅約５ｍ、深さ約1.2ｍを測る。堆積土内より須恵器・土師器・木製品（つちのこ・槍）等が出土している。この他には、素掘りの仮排水路よりほぼ完形に近い壺・甕等の弥生土器が７点一括出土している。

本調査で注目されるのは多量に出土した木製品で、武具・農具・日用品・装飾品と多彩で、古代の生活における木製品の占める位置がいかに重要であるかがわかるであろう。特に武具は形代と呼ばれる非実用的なもので祭祀に使用されたと思われる。このことは、土師器のミニチュア製品がみられることからも裏付けられるであろう。したがって、検出された沼跡・溝跡は祭祀等を行う宗教的性格の強いものであるということが言えるであろう。（日野町教育委員会　日永伊久男）



竪穴式住居

木製品の出土状況



掘立柱建物

30. さらに広がる平安時代末から鎌倉時代の集落
日野町　松尾遺跡

本調査は日野町の区画整理事業に伴う事前調査で、本年度が第３次調査となる。調査対象は全て都市計画街路に当り、先年度調査地の西側地域に、試掘調査の結果、４調査区を設定し、各々Ｅ区、Ｆ区、27区、28区と仮称した。調査総面積は約5000㎡で、昭和60年11月より実施し、現在調査継続中である。

松尾遺跡は、前回迄の調査の結果、平安時代末から鎌倉時代にかけての集落跡であることが判明しているが、今回の調査でさらに西方へと拡大することが確認された。

Ｅ区における主な検出遺構は掘立柱建物２棟、溝７条、土壙３基である。また地山の段差と平行に列して延びるピット群が検出されたが、詳細は不明である。

遺物は少量であったものの、溝のひとつに集中して、土師器・須恵器の皿、杯等が出土している。なお、試掘において溝と考えられた暗黒褐色粘質土部分が存したが、本調査の結果、自然地形による落込みであることが判明し、同様の落込みが計４か所認められた。

Ｆ区では掘立柱建物６棟、溝７条、土壙16基が検出された。掘立柱建物は６棟共に方位をほぼ同じくしており、４間×４間のものが２棟、２間×２間が３棟、１間×１間が１棟である。

遺物は多くが、土壙からのもので、ＳＫＩ（130㎝×70㎝の楕円形を呈し、深さ25㎝を測る）よりは、土師器（皿・埦）、黒色土器（皿・小埦・埦）、瓦器埦、灰釉埦等が出土しており、当遺跡を位置付ける上で良好な資料となろう。

なお、次年度以降にも当遺跡の調査を予定しており、更に集落の全体像が把握されるものと期待したい。

（日野町教育委員会　小西　忠宏）

31. 弥生中期玉造遺跡の新資料
中主町八夫　八夫遺跡

八夫遺跡は、野洲川北流右岸の緩扇状地中位にある微高地上（標高約89.5ｍ）に存在する、弥生時代前期（新）から続く複合遺跡である。今回の調査は、個人の農業用倉庫建築に伴う約200㎡の事前調査で、昨年度調査地の北約80ｍに位置する。

検出された主な遺構には、弥生時代中期～古墳時代前期の溝一条、井戸一基、小規模な掘立柱式と考えられる建物跡などがある。この内調査区を斜めに横切る東西方向の溝は、自然流路の多くが北流するのに対し東流しており、人工の水路と考えられる。溝の形状は、現状で幅４～５ｍ、深さ約0.8ｍで、北岸（左岸）が二段掘、南岸（右岸）は急激に落ち込むもので、二回

調査地全景

以上の掘り直しが溝の断面観察により確認できる。当初の溝は、幅３ｍ以上、深さ0.5ｍ以上の浅い弧状のもので、出土遺物よりⅢ様式前後に開削されたものと考えられる。堆積土の多くは、灰色細砂層又はシルト質砂層であり、可成りの水量が常にあったと考えられ、用水路として使用されていた可能性がある。その後Ⅳ様式末に溝の右岸（集落内）側に幅2.5～３ｍ、深さ約0.9ｍの掘り直しがみられ、Ⅴ様式後半～庄内期の多量の土器で最終埋まっており、その後改めて掘られることはなかった。堆積土はシルト混りの粘土や粘質土であり、溝内の水は常に流れているのではなく滞水状態にあったものといえる。

この環濠状の溝内からは、多量の弥生土器と共に石包丁・石鏃・石剣などの石器、鍬などの木製品の他に、大中技法になる碧玉製の管玉未製品が出土しており、本遺跡内に玉造の存在したことが明らかとなった。これにより近江における玉造遺跡は、野洲川流域で４遺跡、大中ノ湖周辺域で２遺跡の合計６遺跡となった。

今後の発掘調査により、複数帯の環濠や玉造工房跡が本遺跡より発見されるものと期待される。

（中主町教育委員会　辻　　広志）

32. 森ノ内遺跡より３枚の木簡出土
中主町西河原　西河原森ノ内遺跡

中主町教育委員会は、昭和60年度の中主町土地区画整理事業に伴う、森ノ内遺跡の発掘調査を実施してきた。調査の結果、敷地の北部トレンチより奈良時代末期の柵１列、溝４条、井戸１基、掘立柱建物の柱穴を多数検出した。下層から７世紀後半の掘立柱建物２棟と７世紀後半から８世紀前半にかけての溝７条を検出した。

掘立柱建物２棟は、桁行６間以上×梁間３間、桁行4間以上×梁間2間の規模で互いに平行に隣接している。

南北溝（幅３ｍ、深さ１ｍ）の上層より８世紀前半の木簡が出土した。この木簡は、長さ52㎝、幅6.4㎝、

厚さ0.8㎝の短冊形で野洲郡内の有力豪族の人物名29人を連記している。「戸主石辺君玉足」、「戸主三宅連唯麻呂」、「戸主登美史東人」、「戸主馬道首少広」等、その多くは朝鮮系の人物名である。

もうひとつの南北溝（幅1.5m、深さ0.6m）より7世紀後半の木簡が出土した。この木簡は、長さ41㎝、幅3.5㎝、厚さ0.2㎝の短冊形である。これには、椋直という人物が森ノ内遺跡にいたと考えられる卜部に宛た指示文書で和文体で書かれているのが注目される。

『自分（椋直）の稲は、馬で得たので私は帰って来た。卜部は、自分で舟頭を連れて稲を取りに行きなさい。その稲のある所は、「衣知評平留五十戸旦波博士家」』である。

排水溝より出土した3枚目の木簡は、残存長68.5㎝、幅7.2㎝、厚さ0.5㎝の荷札である。上段には「馬甘罔」等の納税物品、中段には「小女児罔罔罔六□」のように各個人の人頭税の数量と思われる文字が書かれている。この木簡の年代は、層序関係より7世紀後半と考えてよいだろう。（中主町教育委員会　徳網　克己）

33．弥生時代後期の方形周溝墓

野洲町富波　富波東遺跡

調査地は、国鉄野洲駅の北東約1.5㎞に所在する。発掘調査は、個人住宅建設計画に先き立ったもので、昭和60年度国庫補助事業の一環として実施した。調査対象面積は約300㎡と小規模であるが、発掘調査の結果、弥生時代中期末～後期初頭の方形周溝墓、平安時代後期の土壙などを検出した。方形周溝墓は合計4基が確認されている。調査面積が限られているため、全容を知りうるものはないが、一辺6～8m前後の規模と推定される。また周溝を共有するものが多く、周溝には一部陸橋部が認められるものがある。出土遺物としては、4号方形周溝墓周溝内より、壺3点、台付小型甕1点の計4個体の供献土器が確認されており、また1号方形周溝墓の周溝内からも、底部穿孔された受け口状口縁甕が1点完形で出土している。この他に平安時代後期の土壙が4基検出されているが、同時期の掘立柱建物などは、今回の調査では確認できなかった。

土壙内からは、黒色土器、土師器、灰釉陶器などが出土しているが、このうち黒色土器については、11世紀中頃に位置付けられ、手法的には、いわゆる「畿内」的な手法と、後出する近江の地域色を強く示す手法との両者が混在する過渡的様相を示すものであり、近江の黒色土器生産を考える上で、良好な資料になりうると考える。

冨波東遺跡については、これまであまり発掘調査は実施されておらず、今回の調査においても、生和神社や朝鮮人街道に近いことから、当初中世集落に関連する遺構が検出されるものと予想されたが、結果として弥生時代の方形周溝墓を検出することができたのは、予想外の大きな成果であったと考える。

（野洲町教育委員会　森　　隆）

34．弥生～室町時代の集落跡

野洲町冨波甲　野々宮遺跡

約60,000㎡に及ぶ宅地造成に先立ち昭和59年より調査を実施している野々宮遺跡では、本年、町道南桜永原線、旧朝鮮人街道に沿った約11,000㎡について調査を行った。その結果、削平を受けた微高地とその間の埋没谷を明らかにすることができ、微高地を主として各期にわたる集落、墓跡が発見された。

弥生時代後期には微高地の縁辺に円形住居5棟と方形住居2棟の都合7棟の住居跡群と付随する土壙や井戸、溝を検出した。住居には磨製石鏃やミニチュア土器をもつもの、テラス状施設を有したものなど個々の住居に大きさや形態、出土遺物の上で格差が見受けられる。

古墳時代後期～飛鳥時代にかけても2つの住居群が捉えられ北側の微高地で2棟、南で6棟の竪穴住居を検出した。南の住居群は南北方向の住居が微高地の最頂部に添って東西に列をなして築かれており、その縁辺には同一軸の掘立柱建物（2間×3間）2棟も検出されている。出土遺物には甕、杯、鉢、鍋等の日常雑器のほか、紡錘車や墨書の施された斎串なども出土している。野々宮遺跡の特徴は限定された立地条件の中で、小単位ごとの集落構成が把握できる点にあり今後更に詳細な検討を加え、各期の集落像を明らかにしたい。（野洲町教育委員会　進藤　　武）

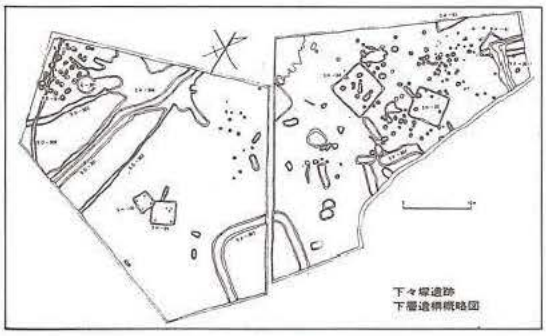
35．掘立総柱建物跡より円面硯出土

野洲町　下々塚遺跡

1月末より野洲病院の南側2400㎡の発掘調査を実施した。

今回、大きく上・下二層に分けて調査を実施した。

上層では、主に7・8世紀代の遺構を検出した。中でも4間×4間の掘立総柱建物跡（SB 101）を検出



下層遺構概略図

し、その柱穴の中より7世紀終末から8世紀初頭に相当する円面硯が出土した。円面硯は野洲町内では小篠原遺跡で一点でており2例目である。その他には、南北方向に伸びる微高地を発見した。上層よりの主な出土遺物には、灰釉・緑釉・青磁等が出土しており、特に鉄滓とフイゴの羽口とみられる管状の土製品が2点出土している。

下層では、方形周溝墓3基、古墳時代前期の竪穴住居跡3棟、7世紀中頃の竪穴住居跡3棟、7世紀末の掘立総柱建物跡2棟、古墳時代中期の溝などを検出した。

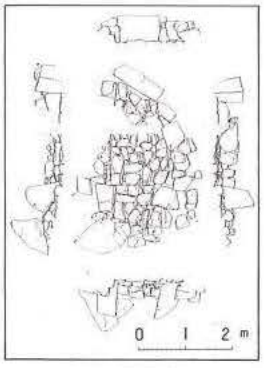
方形周溝墓は、一定の間隔をあけて3基検出した。SX1302、303は周溝より弥生時代後期初頭とみられる壺形土器が出土している。下々塚遺跡では大行事神社東側の調査で多量の土器を伴う後期中頃の溝を検出していただけで今回初めて明確な遺構を検出した。

掘立総柱建物跡は、3間×3間を1棟と、その北側にもう1棟（規模不明）検出した。

上層の建物跡を合せて2群の建物跡が検出されたが、郡衙跡等と推定されている小篠原遺跡や東山道の推定ルートがすぐ北側を通っていることから、それらとの関連が考えられる。(野洲町教育委員会　杉本　源造)

36. 平地に位置する後期古墳

野洲町北桜　塚の本古墳



石室実測図

圃場整備事業に伴う北桜地域の発掘調査は、本年度が最終年の第7次調査となる。本年度の調査は、現北桜集落の北側、三上山の東麓に面した地域（A地区）と、先年度一部試掘調査を実施した、近江富士団地に隣接する地域（B地区）の2か所、計45000㎡が対象となった。本年度の調査では、集落に関連する遺構についてはほとんど見るべきものがなかったが、B地区において古墳を1基調査している。古墳は、従来より花崗岩の石組みが露出しており、塚の本古墳と呼称されている。封土はまったく残存しておらず、石室も、天井部はもとよりかなり破壊されているが、調査の結果石室の基底部は比較的良好に保存されていた。石室のプランは両裾式の横穴式石室で、羨道部は南に開口する。石室の全長2.5m、全幅1.3mを測る。奥壁は花崗岩の一枚岩で斜めに歪み配置されているため、石室プランは長方形でなく台形状を呈する。また閉塞石も一部残存する。石室の床面は全面に拳大から人頭大の礫を敷きつめている。供献遺物は、西壁に沿った部分から多く出土しており、全て須恵器である。この他にも南東隅付近からも須恵器台付長頸壺が1点出土しており、いずれも現位置を保つ。器種は、蓋杯が多く計10点、この他に長頸壺1点、台付長頸壺1点、長脚二段高杯1点が認められる。これらの須恵器は、手法その他の特徴から、同一工人の製作による一括遺物として捉られ、時期的には飛鳥I期に比定される。北桜地域には総数60基前後の後期古墳の存在が知られているが、いずれも山麓部に所在しており、塚の本古墳のように平地に位置するものは認められない。いずれにせよ北桜地域において、実際に発掘調査された古墳は、本古墳がはじめてであり、貴重な知見であると言えよう。　(野洲町教育委員会　森　隆)

37. 白鳳～奈良時代の寺院跡か

野洲町北村　北東廃寺

交通安全施設工事に伴う発掘調査で従来北東遺跡（散布地）としていた地点より白鳳時代～奈良時代の寺院跡かと思われる跡が検出できた。地元ではこのあたりを瓦塚と呼んでおり10年以前のほ場整備により多数の瓦の出土をみていたところで、以前の地図では南北地割の残る2町四方の南西隅に大量の瓦を出土した溝があたっていることがわかった。

(㈶滋賀県文化財保護協会　木戸　雅寿)

38. パレススタイルの壺が出土

栗東町高野　県道高野遺跡

県道守山～高野線に伴う発掘調査で14m×70mの部分において実施した。結果庄内期から布留期の竪穴住居跡が合せて6棟みつかった。ほかにはパレススタイルの壺が出土している土壙等がある。また11世紀末代の掘立柱建物群や6世紀末～7世紀にかけての溝、江戸時代の溝等が同時に検出できた。

(㈶滋賀県文化財保護協会　木戸　雅寿)

39. 古墳時代の大集落跡

栗東町高野　高野遺跡

調査は、琵琶湖大橋有料道路建設工事に伴うもので前年度調査区の北側先線、約20m×230mを対象として、昭和60年5月から10月にかけて実施した。

その結果、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・方形周溝墓をはじめとした多数の遺構が検出され、また、それら遺構群は調査区の北部と南部の2群に分かれて集中することが確認された。

調査区北部の遺構には、古墳時代後期を中心とした竪穴住居跡22棟・平安時代後期の土壙墓等がある。竪穴住居跡のうち6世紀後葉以降のものには、良好な状態でカマドが遺存しているものもみられた。カマドには長い煙道をもつものが目立ち、住居の北辺あるいは東辺に作りつけられている。また、土壙やピット中より、移動式カマドの破片も出土している。竪穴住居跡のうち4棟は7世紀末葉まで時期の降るものであり、7世紀前葉以降、この時期までの竪穴住居跡および遺物については確認されなかった。平安時代の土壙墓は全長約2.8m、幅約1m、深さ約0.6mの規模のもので、焼石・黒色土器椀2点・土師皿1点・土師小皿8点の出土をみた。

調査区南部からは、方形周溝墓・掘立柱建物跡などが検出された。方形周溝墓主体部については既に削平を受けており、周溝内からも供献土器などの出土はみられなかった。掘立柱建物は2棟確認され、そのうち一方のものは、柱掘形内出土土器より8世紀後半代の時期が想定される。南部の遺構群については、前年度の調査区や、栗東町調査の岩畑遺跡の遺構の拡がりのなかでとらえられるものである。

以上、主要遺構を概観してみた。本遺跡は古墳時代以降、断続的に形成された模様であり、当地においての集落の盛衰を伺う上で貴重な資料を呈示するものである。　(㈶滋賀県文化財保護協会　平井　美典)

遺構検出状況

40. 琴状木製品出土

守山市笠原町　笠原南遺跡

県道笠原～荒見線に伴う発掘調査で未周知の遺跡であった。調査区の長さ200mにわたり弥生時代終末～古墳時代初頭にかけての掘立柱建物群を中心に井戸、河道、土壙等が多数検出されている。特に河道とおぼしき5m幅の溝からは鍬・鋤等の大量の木製品とともに弥生時代終末～古墳時代初頭にかけての土器が出土している。また特に、川底より折り重なるように琴状木製品が出土している。遺構は柱を残す柱穴群、素掘の井戸がある。他の時代のものとしては宋銭、銅製の鍔帯を出した中世の溝がある。

(㈶滋賀県文化財保護協会　木戸　雅寿)

41. 中世の集落跡

守山市山賀町・杉江町地先　杉江遺跡

新守山川改修工事に伴う事前調査として実施してきた杉江遺跡の本掘調査も本年度で2年目を迎え、前年度に引き続き中世集落跡を中心として調査を進めた。今年度は、通称浜街道から下流へ向けての約170mの区間について調査を行った。以下に、その概要を記す。

掘状遺構・自然流路で区画された自然堤防を利用した2か所の高台部と、それらに隣接した低位部には、それぞれ2面の中世遺構面が検出された。各遺構面は、掘立柱建物・倉庫・土壙墓・井戸・溝等の遺構で構成される。今回も前年同様の大型礎石建物を検出したが、隣接する溝内から該当期の瓦を若干ではあるが出土しているため、瓦葺建物であった可能性もある。遺物としては、土師質土器・黒色土器を主体として、信楽・常滑の擂鉢・こね鉢・大甕や、青磁・白磁の輸入陶磁器類、瓦質陶器等多種多様である。また小片ではあるが、滑石製の石鍋も出土している。7～8世紀代の須恵器も出土しているが、遺構は削平されているのが見受けられない。

浜街道沿では、布留式併行期の土器を検出した溝・土壙が検出された。隣接する旧河道からは、この時期の土器の出土があったが、遺構は検出されていない。したがって、下層遺構として存在が想定されていたこの遺構面は、明らかに存在していたが、あくまでも部分的にしか残存していないことが判明した。(㈶滋賀県文化財保護協会　小竹森直子)

遺構検出状況